

美研工房ワークショップ「もの と わたし と」報告

松 山 聖 央

はじめに

2020 年のはじめに発生したコロナ・パンデミックにより、私たちはできるだけ「自宅」にとどまることを余儀なくされた。多くの人々にとってそれはストレスフルな経験であり、その影響を少しでも解消すべく、たとえば仕事や学習の場面ではオンラインの活用、プライベートな時間の過ごし方については「おうち時間」を充実させるアイテムやヒントが提案・整備されてきた。しかし、望まざるかたちではあるものの、「自宅」に注目が集まったことそれ自体を、別のかたちで生かすこともできるのではないだろうか。つまり、ステイホーム状態をただ解決・改善すべき問題と見なすのではなく、ステイホーム要請下ではもちろん、考えてみれば平常時にも一日の多くの時間を過ごす「自宅」を、私たちの重要な生活環境のひとつととらえなおし、生活者の視点でそこがどのような場所なのか、よりよい生の営みのために、私たちには何ができるのか、ということを考える契機としてみるという試みである。

こうした背景から、2020 年 9 月より、松井健太さん(JSPS 特別研究員 PD / 千葉大学、本稿執筆時)の主宰により「自宅」研究会が立ち上がった。この研究会は、おもに建築・都市計画論と環境美学を専門とするメンバーから構成され、最初の 1 年ほどは関連文献の読書会や「自宅」をめぐる概念整理の作業を行った。さらに 2 年目以降は、筆者が近年取り組んでいる人工物の環境美学の観点から、「自宅」におけるヒトとモノの関係性に着目し、そのありようについての考察を進めている。「自宅」には、自ら購入したもの、人からもらったもの、ときには拾ったものなど、さまざまなモノが集積し、その環境を構成しており、それらはたんに日常の用に供されるだけでなく、ときに記憶や思い出のよすがとなったり、はたまた「断捨離」ブームなどに見られるように、むしろ敬遠され放棄される対象となったりすることで、道具連関を超えた関係を私たちとのあいだに結んでいる。こうした関係性を、「承認」という概念を手がかりに詳らかにすることが本プロジェクトの目的である。その方法として、学術的なアプローチだけではなく、芸術家やモノに携わる実践者との協働をつうじて、創造的・発見的にアプローチすることを目指しており、本稿ではその一環として開催したワークショップの概要を報告する。

1. ものと記憶——ふなだかよさんのシリーズから

今回のワークショップは、近年写真を用いた作品制作に取り組む作家ふなだかよさんとの出会いから始まった。きっかけは、2021 年 10 月 19 日～11 月 13 日に成安造形大学(滋賀・大津)の「キャンパスが美術館」で開催されていた展覧会「Re: Home」である。同大の母体である京都成安学園 100 周年事業のひとつでもあった本展は、企画から開催の時期にちょうどコロナ・パンデミックが重なったことで、そこで新たに得られた着想や課題も加味しながら「Home = 家」をテーマに構成され、本研究とも多くの関心事を共有していた。そうした背景から訪れた調査で目を引いたのが、

ふなださんの写真作品であった（図1・図2）。

展示されていた二つのシリーズのうち¹、私がとくに興味を抱いたのが《哺乳瓶》（図3）や《ベビー服》（図4）など、赤ちゃんにまつわる「もの」をとらえた〈fall〉シリーズであった。とはいえ、実は作品を目にした瞬間には、被写体が「哺乳瓶」や「ベビー服」であると判別することは難しい。なぜなら、写真ごとに異なる大小さまざまなサイズの画面に見出されるのは、明確な輪郭をもった対象の姿ではなく、その残像——上方から下方へと落ちていく「もの」たちの、おぼろげな痕跡——だからである。

のちにふなださんご自身からお聞きした話も踏まえれば、これらはふなださんが子育ての過程で数年前に実際に使用していたが、子どもが成長したいま、使わなくなってしまった育児用品である。たんに道具的な必要性の観点だけからいえば、もう処分してしまっても支障はないそれらを、ふなださんはしかし手放せないでいる。それはなぜか。哺乳瓶やベビー服を処分してしまえば、それらを使用していたころの子どもにまつわる記憶までもが、一緒に消えてしまうのではないか——そんな一抹の不安があるからだ。おそらく、多くの人々は、同様の経験に思い当たるだろう。子育てに関するものではなくとも、自分自身が幼少期に大事にしていたもの、特別な贈りもの、長年大事に使いつづけたもの、そういったものはただ用が済んだからといって、簡単には手放せない。といって、実用的には役目を終えているならば、結局は自宅の片隅にしまい込まれておくことになる。そんな宙吊り状態の「もの」



図1 「Re Home」展入口（成安造形大学キャンパスが美術館）

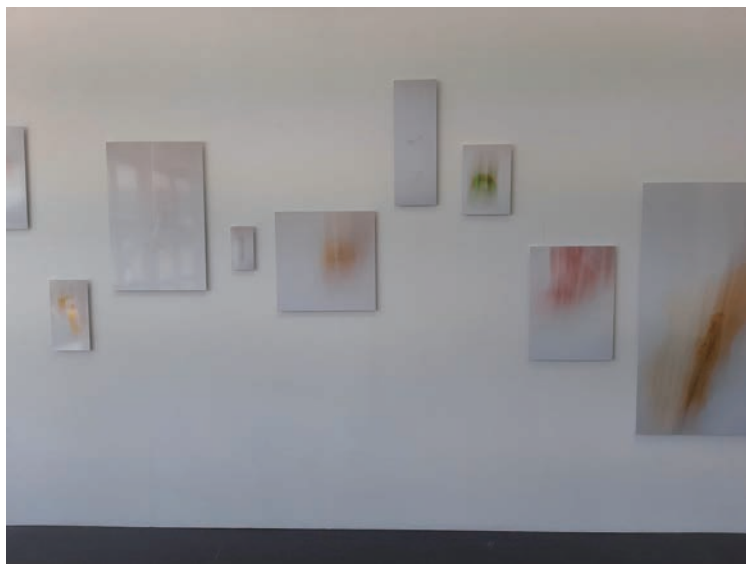


図2 ふなだかよさんの〈fall〉シリーズ



図3 ふなだかよ《fall 哺乳瓶》
2018年

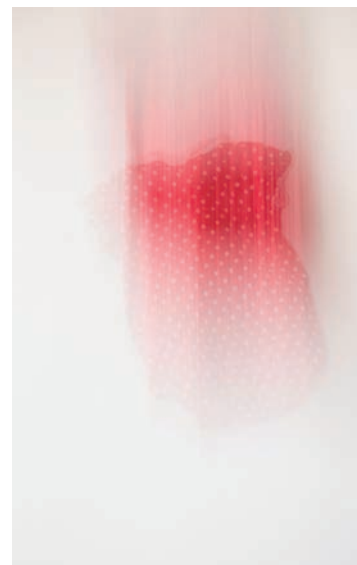


図4 ふなだかよ《fall ベビー服》
2018年

と向き合う作業が、このシリーズでは試みられている。

2. 道具としてのもの——使用のうちで、使用をこえて

こうした作品との出会いを経て、ふなださんが作品で実践した「もの」との対峙を追体験するワークショップを企画した。今回は、「自宅」研究会のメンバーである筆者、松井さんに加え、生活美学研究所助手の井本真紀さん（ワークショップ開催当時）、さらに本学学生が参加者となり、それぞれが自宅からさまざまな「もの」を持ち寄った。

ワークショップでは、撮影に入る前に、まず参加者同士で「もの」を紹介し、なぜそれを選んだのかということを語る時間を設けた（図5）。たとえば筆者が持参したのは、約10年分の手帳である。A5サイズのほぼ同型のものを、色やカレンダーのレイアウトを違えながらも毎年使用している。おもに予定の管理に使っており、日記のような書き込みはほとんどないため、その年が過ぎれば見返すこともなく、あとから必要になるような情報がたいして含まれているわけでもない。それでも、おそらくはふなださんの感覚に似て、手帳を失うことはその使用とともに刻まれた一年ごとの時間を、その時間の経過のなかでなされた行為や思考を、あるいは自分以外の他者や事物とのあいだに生じた交流を失うことになるような気がして、めったに開けることのない箱にしまい込みながらも、幾度かにわたる引っ越しのたびにそのまま連れ歩いているものだ。こうしたスケジュール帳は、日常における個々の実践や動作をその場その場で手助けするような「もの」に比して、道具的な抽象性が高い。しかし同時に、当該の一年のあいだは、ほかの何よりもよく手に取り、個々の行為の連なりからなる、わたしという主体による世界の分節化を包括的にとりまとめている道具でもあるといえるだろう。



図5 撮影前に「もの」について語る参加者

手帳に加え、もうひとつ、こちらはいかにも道具的な「もの」の事例としてあわせて持参したのが、折り畳み傘である。これは無印良品にて自分で購入した、なんの変哲もない代物だが、晴雨兼用で、コンパクトにも、長いままでも畳めるという利便性から、長らく愛用してきた。ただ、酷使の結果、最近では伸び縮みする柄の動きが悪くなり、使用に支障が出はじめたことから使用の頻度も減り、買い替えを検討していた。大量生産された安価な日用品で、贈り物としてももらったわけでもなく、ほぼ同じ商品が現在でも無印良品で扱われているため、買い替えを躊躇する理由はさ

ほど見当たらない。それでも、手放すことへのためらいの理由として思い当たる節があるとすれば、これまでに外出先で何度となく置き忘れたこの傘が、幸運にも、そのたびに舞い戻ってきたという、大袈裟に言えば物語とでもいうべきものがあるからではないだろうか。あるときは自ら取りに戻って、あるときは再訪の機会のないその場所の人に送ってもらって。筆者自身も一度は置き忘れるのだが、完全に忘れ去ることはなく、また傘の方も筆者が取り戻す手立てを講じるまでのあいだ大人しく待ち続けたことでやがて再会を果たす。そうした偶然の積み重ねが、道具としての傘の本来の機能とは無関係ながらも、この対象と私との関係を強固で特別なものにしている。いやむしろ、離別と邂逅の発端である外出先での置き忘れも、広い意味では折り畳み傘の使用という行為に内包されているというべきかもしれない。なぜなら、すでに降っている、あるいは数時間後に降りだすかもしれない雨を避けるという実用的な目的を達成するために、私はそれを手に取り、外出先に携えていくのであり、その意味では、たとえ実際にささなくとも、家から持ち出していくこと自体がすでに使用行為の一部だと見なせるからである。

手帳と折り畳み傘——持ち主であるわたしとのかかわり方や道具としての特性は異なる二つの「もの」だが、以上のように考察してみると、ひとつの共通点が見えてくる。それは、わたしと「もの」が、まずは使用者と道具として出会い、予定の管理や雨を避けるといった実践的な使用行為が遂行されていくが、そのプロセスにおいて、デザインや設計の段階でそれに賦与された機能に即して期待されていたわけではない、ときに持続的で、ときに突発的な「出来事」が、私と「もの」のあいだには生起するということだ。しかし同時に、本来の機能から逸脱する「出来事」は、本来的な使用行為が基礎にあるからこそ生じるものでもある。それはたとえば、20世紀中盤の芸術動向として知られる「ハプニング」のように、起こる内容の偶発性や一回性はさておき、起こることそれ自体は作家によって企図されていた出来事とも異なる。わたしと道具的な「もの」は、あくまでも使用というレールに載せられた両輪として、しかししばしばそのレールからの脱線という「出来事」を孕みながら、ともに歩を進めていくような関係性にあるといえる。

3. ものを手放す

日常の場面において、わたしとものは、実際には道具連関のみに禁欲的に束縛されているのではなく、偶発的な「出来事」の連続においてかかわっていくとすれば、本ワークショップもまた、ひとつの「出来事」だといえる。最後に、参加者の意見も振り返りながら、ワークショップの過程をまとめておきたい。

ワークショップは、ふなださん自身の作品制作を追体験するかたちで、ふなださんに設営してもらった撮影機材を用いて、同様の手順で行った。各自の持ち寄った「もの」を、脚立に数段上った位置から落下させる、または下から投げ上げて落ちてくるところを写真に収めるというシンプルな手法である。ただ



図6 10年分の手帳の撮影



図7 撮影ごとにカメラの画面で確認する

あるいは投げ上げるとほぼ同時に、ほとんど勘にまかせてシャッターを切ることになる。落下場所にはクッションが設置してあり、致命的に「もの」が壊れる心配はないということもあるが、必死にタイミングを合わせて撮影を繰り返すという行為に集中しはじめると、他人のものを落とす行為に少なからず緊張を覚える落下係とは裏腹に、持ち主の方は、自分の大事なものが何度も落とされているということは案外気にならなくなる。むしろ、出来上がってくる図像をよりおもしろいものにしたいという創作意欲に駆り立てられ、落とし方や二つ以上の「もの」の組み合わせなど、それぞれに工夫を凝らしていた（図6・7）。

落下と撮影のプロセスにおいては、「もの」がそれまでの「もの」ではなくなるような感覚を覚えたという意見が何人かの参加者から出た。このとき「もの」は、自らの手を離れ、日常の道具連関から逸脱したのはもちろんのこと、最終的には落下係の手からも離れ、ただ重力が導くままの軌道を描いて落ちていくだけの物体と化す。「もの」の形状によって、まっすぐすとんと落ちるものもあれば、抵抗を受けてふわふわと、あるいはふらふらと、舞うように落ちるものもある。複数を組み合わせると、手を放すわずかなタイミングのずれによって、「もの」どうしの位置関係や連なりもそのたびに变化する。実際には、10分の1秒、あるいは100分の1秒ほどの瞬間に生起するその「出来事」は、人間の知覚能力では直接的に把捉できるものではない。したがって私たちは、「もの」の挙動それ自体を克明に見届けているというよりは、写真というメディアに固着された像をつうじてその挙動を追認しているといえる。そしてその像が、明確な輪郭に縁どられた「もの」の揺るぎない姿ではなく、まさに落下していく瞬間の、曖昧かつ動きを感じさせる残像であることによって、「もの」に生起した「出来事」の出来事性が明示される。

この一連の行為は、何らかのきっかけや緩慢な時間の経過のなかで使用されなくなり、道具連関から逸脱してしまった「もの」と、作品制作という、使用とは別の文脈において関係を結び直すプロセスとして解釈でき

し、ふなださんは落とすのも、シャッターを切るのも自ら同時に行ったそうだが、これはタイミングをはかるのがなかなか難しいとのことで、今回は、落下係を他の参加者に委ね、「もの」の持ち主は、撮影に専念することとした。

実際に撮影を始めてみると、「もの」はあっという間に落ちていくため、落下の動きを追っているとシャッターを切るのが間に合わないということに気づく。ファインダーを覗くのではなく、落下係が向こう側で手から「もの」を放す、

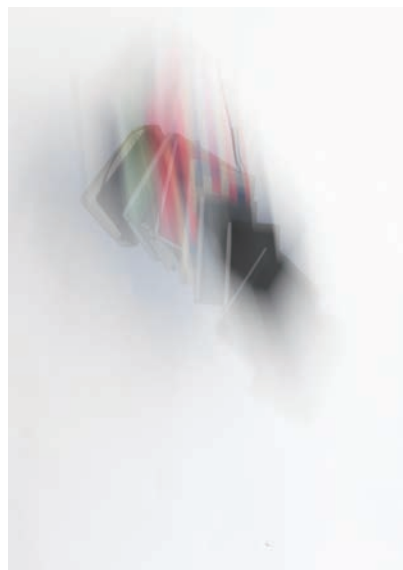


図8 筆者撮影の作品(10年分の手帳)

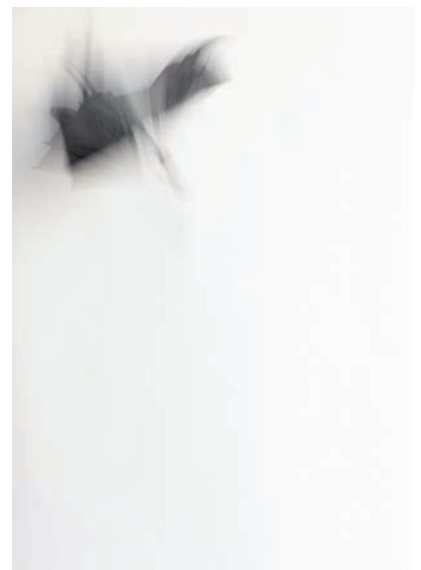


図9 筆者撮影の作品(折り畳み傘)

る。加えて先に述べたように、落下という動きは、刹那に過ぎないとはいえ、「もの」がわたしたち人間の意図的な行為から逃れる瞬間であり、その瞬間に向けてシャッターを切ることは、たとえば肖像写真のように丁寧に配置してかしまった対象を撮影するのとは異なる経験であるといえよう。わたしに使い古されてきたものが、ほんの一瞬、わたしが知覚するのすら困難な動きを見せ、目の前をすり抜けていく。かろうじてシャッターを切ることで固着されるのは、不明瞭な残像としての、これまで知らなかった「もの」のすがたである。

おわりに

この20年ほどのあいだに、素人が個人レベルでも扱えるカメラやスキャナなどの機器が発達したことで、なんでもデータ化して保管できるようになった。その波は文書類のみならず、空間を占めるような立体物にも及びつつある。役目を終えた「もの」は、エコロジータ的な観点から次の使用者に引き継がれたり、あるいはミニマリズム的な観点から潔く放棄されたりするが、せめてそのすがたを、多くの場合は平面の写真に撮り、あるいは近年ならば3Dでスキャンすることで、わたしたちは「もの」を手放す罪悪感を減じるとともに、「もの」にまつわる記憶のよすがを自らの手元にとどめようとする。しかし、ふなだかよさんとともにこのワークショップで探ったのは、そのように現代風に合理化された喪の儀式ではない。むしろ、落下と撮影をつうじて経験されるのは、なじみのない他者としての「もの」との遭遇であり、いまだわたしの所有物でありながらわたしの意のままにはならない「もの」の一側面なのである。

本稿で報告したワークショップは、トヨタ財団2021年度研究助成プログラムで支援を受けた研究プロジェクトの一環として実施した（課題番号D21-R-0092「ヒトとモノの承認関係を手がかりとする「自宅」環境の包括的研究——環境美学、建築・都市計画論、芸児術実践の融合的アプローチから」）。

注

- 1 この展示の様子は、展覧会図録「2021 秋の芸術月間成案アーツアテンション 14 Re: Home 記録集」（成安造形大学、2022 年）pp. 10-12 に掲載されている。なお、〈fall〉シリーズとあわせて展示されていた〈Mt. love〉〈for you〉シリーズは、ふなださんとふなださんの母親との関係をテーマにしており、二つのシリーズを通してみることで、母子関係において作家自らが占める位置が変化していくさまをたどることができる。